

---

# 少女は雷光を見たか

無銘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女は雷光を見たか

### 【NZコード】

N6453Y

### 【作者名】

無銘

### 【あらすじ】

かつて家族や幼なじみと引き離された少女は、二人の男と出会う。一人はかつて仮面の男達を支え続けた男。もう一人は過去に少女が一度だけ見た赤い雷のような男であつた。果たして少女は、男達は出会いの先に何を見るのか…。

キャラ崩壊、原作崩壊、知識不足その他が過分に含まれておりますのでご注意下さい。

(前書き)

本作品は原作レイプを通り越して原作を背後からパイルバンカーで  
撃ち抜くくらいの所業をやらかしておりますので十分ご注意下さい。

土砂降りの雨と雷が激しく降り注ぐ中、少女は走っていた。

己の姉を、生まれを、運命を呪いながら走っていた。

己の姉がIRSを開発したといつだけでも口を捕らえようとする者達から逃げる為に走っていた。

追っ手はIRSを装着している。

普段は何かとつけてしつこく監視をしている連中は今は仲良く伸されている。次会つたら給料泥棒とでも言ひてやるつ……次があれば、だが。

今日は剣道の全国大会に優勝したという本来なら晴れやかな日なのに実に最悪だ。

この土砂降りの雨と雷。

幼い頃から父に教わり、今では全国大会で優勝する程にまで打ち込んでいた筈の剣道が、実は今の自分にとって単なる憂き晴らしの手段でしか無かつたという事に気付いてしまった。

挙げ句の果てに姉のせいで、姉が発明したIRSに追い掛け回されている。

これを最悪と言わざして何と言へばよこのだろ？

ましてや姉の…今自分を追い掛け回しているEISを生み出した姉のせいで家族と、そして想いを寄せていた幼なじみと長い間引き離されているのだ。

今は人生最悪の日と言つても過言ではない。

それでも少女は逃げる為に走るが誰かとぶつかり尻餅をつく。

男だ。ジャケットの中にHSの字が書かれたシャツを着ている。両手には黒い手袋が嵌められている。

男は少女を助け起こす。そして少女がEISに追われていると察すると

「逃げるんだ！」

と叫ぶ。そのまま少女は走り出し、やがて手近な隠れ場所を見つけると息を整え、追跡者をやり過ごすべく暫く隠れる事にした。

どれくらいの時間が経つただろうか。

土砂降りの雨が降り注ぎ雷鳴が轟く中、少女の視界にEISが飛んで…いや飛ばされてきた。

まるで何かに思い切り蹴り飛ばされたかのようにHSは吹っ飛び、少女の目の前で無様に地面に転がっていた。

搭乗者の意識はないようだ。

そしてそいつはそのISが吹っ飛んできた先から現れた。

赤いプロテクターに赤いライン、胸にSの字が書かれた赤いカブトムシだ。

そしてそのカブトムシは姿を変える…先ほど自分とぶつかった男の姿に。

男は見ている少女に気付いていないのか、ISの搭乗者が当分目覚めそうになることを確かめると黒い手袋を両手に嵌め直し、立ち去つていった。

土砂降りの雨と雷が激しく降り注ぐ中、少女は…篠ノ之箇は赤い雷光を見た。

IS学園近くにある街の外れに位置する武術道場『大野練武館』。

ここには連日剣術や居合のみならず柔術、槍術、杖術などの武術を学び、腕を磨く為に多くの者が押し寄せ日夜稽古に励んでいる。

特に剣術に関しては全日本剣道選手権を6連覇した中屋敷を始めとする数多くの逸材を育て上げた事で名高く、名門道場として剣道界にその名を轟かせている。

その気合の声や竹刀や木刀で打ち合う男が絶えず響き渡る道場の片隅で、男と少女が胴着姿で正座した状態で対面していた。

男の方はこの道場の師範である大野。いかにも『道場の主』と言つた感じの厳しい風貌に引き締まつた肉体をしている。

対して少女の方は長い黒髪を後ろに纏め上げた髪型…所謂ボーネルに歳不相応にスタイルの良い美少女、と一見するとこのむさ苦しい道場には場違いな感じがする。

だがこの男臭さが充満している道場に通う女性は意外と多い。

その女性の半数以上は近くのHS学園の関係者だ。

HS学園の教師であり、かつては名実共に最強のHS操縦者としてその名を轟かせた『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬や、『暗部殺し』としてその筋では恐れられる更識家の第17代目当主である更識楯無などはHS学園から足繁く道場に通い詰めている。

特に織斑千冬は先述の中屋敷、その同期で中屋敷と劣らぬ技量を持ち、今では剣術指南を担当する撃劍師範代も務める岡田、全てを統括する總師範代として道場生を纏め上げる高橋、そして道場最古参の中村と飯塚の五人、通称『大野の五虎』と共に『大野の五虎一獅子』と並び称される程の技量の持ち主である。

実際千冬はあまりの強さからHS学園内では剣術の稽古相手が見つからず『大野練武館』の門を叩いた。

それでも千冬と互角に渡り合えるのは何かと他の後輩の指導に忙しい『五虎』くらいで、他は新堀や城谷がやつとまともに千冬とやり

合える程度なのでここでも練習相手が見つからなくて苦労する、と千冬は道場主である大野に零していたが。

そして今大野と対面して座っている少女もまたTJS学園の生徒だ。

しかもその筋の人間が今座っている彼女を見れば、その凛とした佇まいや姿勢、何より纏う雰囲気とその隙の無さから、かなりの経験と技術を持った手練である、と分かるくらいの剣術の腕前の持ち主である。

「…珍しく太刀筋が荒れていたな、篠ノ之」

大野は口を開き田の前の少女…篠ノ之箒に語りかける。

彼女は中学3年生の頃に剣道の全国大会で優勝した経歴を持つ。

実際彼女は大体学校で言えば2学期が始まるかそれくらいの時期に道場に通うようになつた最新参なのだが、元々の高い地力を短期間で更に向上させ、今では新堀や城田と共に『五虎一獅子』に次ぐ『三羽鳥』と称されている。

「それで真剣を振るつても例えどのような名刀を使えど巻藁どころか髪の毛一本すら切れぬぞ?」

そつ言つて大野は箒の傍らに置かれている真剣…刀を見やる。

今日の箒は居合の稽古として巻藁を斬りに来た。

基本的に居合道では抜刀、納刀、及びその心構えを説く事を重視しており、巻藁のような何かを斬らせる事はあまりない。

だが『大野練武館』は例外で大野の許可を得られればいくらでも巻藁を斬つても構わない事になつてゐる。

その許可を得るには大野の前で何回か素振りをして見せればいいのだが、大野は今日の箒の素振りからその太刀筋と心の乱れを見抜いていた。

「それ程の業物、ましてやお父上から譲り受けた大切な代物を無下に刃零れさせるわけにもいくまい」

箒の刀はかなりの業物であり、しかも彼女が長い事会えないでいる父親から譲り受けた大切な物だと大野は知つてゐる。

刀：日本刀とは切れ味こそ異様なまでに鋭いが扱いが非常に難しい。きちんと刃筋を立てて斬らねば僅かなズレですらその切れ味は殺され、刃はこぼれる。

だからこそ大野は太刀筋に乱れは無いが、心に迷いは無いかを見るために素振りをさせる。

それに心に迷いや何か屈託があればそれは自然と太刀筋のみならず、足運びや呼吸などありとあらゆるものも乱す。それがごく僅かであつても真剣を扱う時には命取りになる。

特に巻藁を斬るならまだしも命懸けの真剣勝負であれば死に直結する。今は決闘は禁止されている為そんな機会は無いが、だからと言つた真剣勝負に重要な心構えを疎かにする事は武術を嗜む者としては出来ない。

「さしそうめ恋煩いと言つた所か…確か織斑一夏君、だつたか」

「何故それを…！？」

「そのような驚いた顔をするな。私とて人の子、木の股から産まれてきた訳ではない。それに岡田から大体の話は聞いているからな」

「…岡田さん！」

「いや悪い悪い、先生がお前の太刀筋乱れるのは恋煩いが原因だ  
るから俺に聞いてきたからつい話しちまった」

篠は近くにいた岡田に文句を言つが岡田は人好きのしそうな笑顔を浮かべ謝る。

人なつっこい上に後輩の面倒見が良く世話好きな岡田は、新参の篠が早く道場に馴染めるようにとよく篠と話しており、剣術の話から恋の相談まで何かにつけて篠の話を聞いていた。

さしもの岡田も篠やそれ以外の複数の女性から好意を寄せられ、しかも割合ストレートなアプローチをかけられても自分に向けられている好意に気付かないという、最早鈍感を通り越して悟りすら開いていそうな篠の想い人の話を初めて篠から聞かされた時は思わず絶句したが。

「それよりその『大野先生が恋という言葉を知つてゐるなんて！？』  
つて言いたげな顔やめてやれよ…困つてゐるじゃねえか」

岡田の言葉を聞いて篠が大野を見ると確かに困つたように苦笑して

いる。

大野は常にストイックで弟子たちにも時に厳しく接するが、基本的には温厚な性格である。

同時に大野は自分の見た目や纏つ雰囲気がいかに厳しいと人に感じさせるものであるかも熟知している。

千冬の頼みで『五虎』を引き連れ特別授業としてEIS学園の学生に剣術を指南しに行つた際には、普段男を馬鹿にしていると聞いていた少女達が自分達を見た途端妙に大人しくなつていた。

いかにもプライドが高そうなイギリス人らしき少女に声を掛けたら明らかに怯えながら対応された。

活発そうな中国人の少女が言うことを聞かなかつたので、少しキツく叱るうと軽く睨んだら泣きそうになりながら命乞いをされた。

眼帯を着けた銀髪の少女とはただ目が合つただけで直立不動で最敬礼された。

ブロンズの少女に至つては自分が直接指南しようと竹刀を向けただけで一夏といつ少年に向けての遺言を周囲に託していた。

もし中村や岡田のフォローがなければ授業すら成り立たず、貴重な時間を潰してしまつたとしてEIS学園の教職員一同に土下座せねばならなかつただろう。

こんな経験をすれば嫌でも自分が他人からどう見られているかは分かる。

「とにかく今日はもう帰つて、少し頭を冷やせ」

大野は表情を戻すと簾にそれだけ伝え立ち上がった。

街外れにある人通りが殆んどない河川敷を、簾は歩いていた。

制服に着替え直して道場を辞した後簾は刀…流石に布に包んで分からぬようにしているが…手に持ち当てもなく散策していた。

（ああしたのも久しぶり、かもしだれないな…）

何故そうしたのかは分からぬ。

いつもよりたまたま不機嫌だつたからなのかも知れない。

或いは今まで鬱屈としていたものがたまたまその時に爆発したからなのかも知れない。

自分と一夏を指導していた先輩が一夏にベタベタしているのを見た途端、簾は思わず一夏をたまたま手に持つていた竹刀で打ち据えていた。

その事に自己嫌悪しながら道場へ向かったはいいが、やはり見抜かれてしまった。

何となく一夏がいるEIS学園には帰りづらい気がして今は頭を冷やすことも兼ねてこの辺りをブラブラと田的もなく散策している。

『モッピー知ってるよ！君がとってもいい子だつて事！』

誰もいない河川敷で女が一人で人形を使って腹話術の練習をしているようだ。

その人形…『モッピー』とやらが何となく自分をデフォルメした感じに見えて思わずその頭を盛大に開放してやろうかとも思ったが止めておいた。

そうやって歩いていく内に篠は自分を尾行している気配に気付いた。

(…9人、いや10人か！)

思わず走り出そうとする篠だが

『モッピー知ってるよ！お前が篠ノ之篠だつて事！』

先ほど腹話術の練習をしていたらしき女があの『モッピー』なる人形を持ち田の前に立っていた。

篠に感付かれず先回りしてきた辺り相当の手練らしい。

思わず腰を落とし構える篠。念の為刀を取出しつでも鯉口を切り抜刀出来るようにする。

(…隙が、無い…！)

動いたら負ける。そう直感的に簫は悟る。しかし女の方は相変わらず『モッピー』を使い簫に語りかける。

『モッピー知ってるよ！お前が姉の篠ノ之束を大嫌いだつて事！そして幼なじみの織斑一夏の事を大好きだつて事！』

(何故その事を！？)

どうやらこの女は相当地方の事を調べてきたりして。

『モッピー知ってるよ！お前が大好きな一夏を独占したい事！そしてお前が一夏に擦り寄る泥棒猫は皆死ねばいいって思つてる事！』

「な、何を馬鹿な！？」

さしもの簫も思わず叫ぶ。当然だ。彼女達は…恋のライバルは大切な友人でもあるのだから。だが『モッピー』は止まらない。

『モッピー知ってるよ！お前がセシリア・オルコットなんてプライドが高いだけで本当はちょろいクセに一夏を誘惑しようとする馬鹿女なんて死ねばいいって思つてる事！』

「違う！」

『モッピー知ってるよ！お前が凰鈴音なんて自分より後から来たクセに一夏の幼なじみ面してベタベタする我儘女なんて死ねばいいって思つてる事！』

「違う！違う！」

『モッピー知つてゐよーお前がシャルロット・デュノアなんて薄汚い妾の子のクセに一夏から愛称で呼ばれて馴れ馴れしくしてゐる腹黒女なんて死ねばいいって思つてゐる事!』

「違つー違つー違つー」

『モッピー知つてゐよーお前がラウラ・ボーデヴィッシュなんて血も涙もないクセにちょっと優しくされただけで一夏を「嫁」呼ばわりしている傲慢女なんか死ねばいいって思つてゐる事!』

「違つー違つー違つー違つー」

『モッピー知つてゐよーお前が更識樋無なんて何考へてるか分からぬいクセに先輩面して自分を差し置いて一夏とベタベタしてゐる性悪女なんて死ねばいいって思つてゐる事!』

「違つー違つー違つー違つー違つー」

『モッピー知つてゐよーお前が布仏本音なんて頭弱そな事しか言わぬいクセに「おりむー」とか呼んで一夏にくつついてくる阿呆女なんて死ねばいいって思つてゐる事!』

「違つー違つー違つー違つー違つー違つー」

『モッピー知つてゐよーお前が更識簪なんて姉へのコンプレックスしか無いクセに一夏に勝手に理想のヒーロー像を抱いてる根暗女なんて死ねばいいって思つてゐる事!』

「違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！」

『モッピー 知つてゐよーお前が織斑千冬なんて家事も向も出来ない  
ただ一夏の姉つてだけのクセに自分を差し置いて一夏を独占しようと  
する暴力女なんて死ねばいいって思つてゐる事ー』

「違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！」

『モッピー 知つてゐよーお前が自分が最初に出会つて最初に惚れた  
のに後からノコノコやつてきたクセに自分から一夏を奪おうとする  
下劣な女共は皆死ねばいいって思つてゐる事ー』

「違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！違つ！」

本当に違つのか？

ふと簾の中からそんな声が聞こえてくる。

本当に違つのか？

本当に違つていないのであるのか？

本当に違つ思想つかれてないのか？

本当にさう思つた事は無いのか？

本当にやつと思つてゐるんぢゃないのか？

(…。)

『モツッピー』はまだ続ける。  
『モツッピー』は最早止められない。

『モツッピー』知つてゐよー。お前がそのクセ怖いから優しい一夏にハッ  
たりしかできない臆病な女だつて事ー。』

「… やめろー。」

必死に頭を振る篠ノ之にはまるだけ。篠ノ之

『モツッピー』知つてゐよー。お前がそのクセ怖いから優しい一夏にハッ  
たりしかできない臆病な女だつて事ー。』

「… やめろー。」

『モツッピー』知つてゐよー。お前が臆病だから力に溺れる事でしか自分  
を保てない弱い女だつて事ー。』

「… やめろー。」

『モツピー知ってるよーお前がだから』そ自分の力の無さを棚に上げて専用機さえあればと他人を妬むしか出来なかつた卑屈な女だつて事!』

「やめりー・やめりー・やめりー・」

『モツピー知ってるよーお前がだから嫌いな筈の犯罪者の姉に専用機をねだつた汚いな女だつて事!』

「やめりー・やめりー・やめりー・やめてくれ!」

『モツピー知ってるよーお前がそつやつて汚い手を使って得た力で今度は他の女を見下すしか出来ない恥知らずな女だつて事!..』

「やめりー・やめてくれ!」

『モツピー知ってるよーお前がそつやつて調子に乗つて嫌いだつた筈の姉と仲直りしようと考へてる調子のいい女だつて事!..』

「やめてくれ…頼むからやめてくれ…頼むからも!..」

『モツピー知ってるよーお前がそつやつてまた姉から力をもらおうとか考へてる卑しい女だつて事!..』

「やめてくれ…やめて…お願いだから…も!..やめて…」

『モツピー知ってるよーお前がそんな織斑一夏に愛される資格なんてこれっぽっちもない最悪の女だつて事!..』

「やめて…お願い…なんで…なんで…」

『モッピー知ってるよーお前がそんな自分に気付かないフリをして織斑一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女だつて事!』

「…やめて…やめて…」

筈には涙を流しながらただただ『モッピー』に懇願する事しか出来なかつた。

『モッピー知ってるよーお前が…篠ノ之筈がそんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女だつて事!』

それでもこの言葉の直後に女が撃つた銃弾を擦つたとはいえ回避しそのまま逃走へと転じられたのは剣士として染み付いた本能故だろうか。

『モッピー』を持つていた女の他に10人ほど追いかけてくるが、暫く走り続けると何とか振り切る事が出来た。しかし微塵も喜びも安堵もない。

(私は…私は…私は…)

やがて走り続けていくうちにつまづき、転がる。そこで筈の意識は徐々に薄れていく。最早、起き上がる気力すらも起こらない。

「…みーしつかしるーき…？」

それから暫くした後に薄れ行く意識の中で誰かに声を掛けられないと知覚するが、それに応える事もなく筈は意識を闇へと手放した。

『モッピー』を持った女とその仲間らしき女達はアジトへと引き上げていた。

「まさか取り逃がすとは…油断したわね」

「擦つたとはいえ麻酔弾を食らつたんだ。当分は逃げられまい」

「しかしよくあれだけの情報を調べられたわね？」

「じつ見えても私はかなり長い間…それこそ彼女に保護プログラムが適用されてから彼女がE.S学園に入学するまでずっと彼女を監視していたのよ？それに『織斑一夏』といつヤツを調べれば自然と色々出てくるもの」

仲間に對し『モッピー』を持った女はニヤリと笑う。

織斑一夏という少年に關わった少女は大抵彼に惚れると同時に性格や言動がかなり変わる。それこそまでの同僚や家族が不審に思うレベルで、だ。

彼女達が所屬している『組織』の情報網を活用してそれらの変化に関する情報を搔き集めて突き合わせて検討すれば大体の真相…織斑

一夏とその周囲の人間関係や抱いている意識というものは見えてくる。

「とはいえ半分くらいはハッタリなんだけど」

そう言って彼女は『モッピー』をしまつ。

この『モッピー』という人形、意図的に篠ノ之箒にある程度似せて作ってある。

そちらの方が感情移入…この場合は箒に暗示をかけやすくなると踏んだからだ。事実彼女は抵抗する気力すら失っていた。

逃げられたのは最早本能レベルにまで刷り込まれた剣士としての心構えがあればこそだつ。

名前の方は適当で箒はモップ、だからちょっと捻つてモッピーと實に安直である。

「しかし今さらあんな女狙う価値あるのかねえ…」

「篠ノ之箒との取引材料としてはうつてつけじゃないか。彼女を使つてE-Sコアの製造法を聞き出すなりこちらに協力させるなり…せめてこちらと敵対させないくらいには出来るだろ?」

「全く、『マスクドライダー』さえいなけりやこんな手間かける必要なんかないんだけねえ…」

彼女達が所属する『組織』の天下最大の脅威は『マスクドライダー』といつコードネームで呼ばれている謎の存在である。

奴らは『組織』の計画を次々と発見しては潰してきており、今では『組織』の動きはかなり制限されてきている。

幸い『組織』はこの世界の至る所に深く根を下ろしている為そこまで『組織』そのもののダメージは大きくて無いがこのままではジリ貧になる一方だ。

だからこそイギリスの第3世代エラで実験機の『サイレント・ゼフィルス』をわざわざ強奪するというリスクを犯してまで戦力の拡大に専念してきた。

だがその『サイレント・ゼフィルス』も… I.S学園を襲撃した際には操縦者の技量もあり複数の専用機持ちと単機で互角以上に渡り合つたそれも、『国際宇宙開発研究所』を襲撃した際には現れた『マスクドライダー』一人に撃退されたと聞いている。

幸い『サイレント・ゼフィルス』は機体も操縦者も何とか戦場から離脱は出来た為組織で回収出来たが、操縦者の『エム』はその屈辱から荒れに荒れているらしい。

そんな状況では『白騎士事件』以来何かと世界をひっかき回している篠ノ之束まで敵に回す事態を『組織』としては避けたかった。そこで彼女が大切に思っている妹の篠をこちらで確保し篠ノ之束を牽制し最低でも中立に、あわよくば味方にしようという事でこの作戦が立案された。

勿論かなりのリスクが伴つが『組織』としてもこの状況を開拓すべくそれくらいのリスクを覚悟せざるをえないのだ。

「何にせよインター・ポールやI.S学園に感付かれると厄介よ……」この

先は慎重にね

『モッパー』の持ち主がそれだけ言つと女達はめいめい解散した。

篝が意識を取り戻したのは布団の中であった。

畳敷の和室の真ん中で篝は布団に寝かされていた。

服装は制服姿のままだ。銃弾が擦つた右腕を見ると処置を施されたのかしつかりと傷口に包帯が巻かれている。

枕元には持っていた刀がちゃんと置いてあつた。

外を見るとすっかり暗くなっている。部屋に掛けあつた時計を見ればもう9時だ。

(一体これは……?)

篝は起き上ると改めて部屋の中を見渡す。何かのトロフィーが何個も飾つてある。

とりあえず部屋の外を探索すべく襖を開ける。廊下に出て階段を降りると玄関先らしい土間が見えたのに気がつきながらへと向かつ。

オイルの匂いだ。車やバイクによく使われているオイル独特の匂いがその先から漂ってくる。

自分の靴は土間にきちんと揃えてあつたのでそれを履いて玄関らしき場所に出てみる。

(…バイク?)

そこは玄関ではなくバイク屋の店内であった。何台か修理中と見られるバイクが置いてある。

暫く周囲を見渡していると

「おっ、気が付いたみたいだね」

バイクの陰から男性がひょっこりと顔を出し簞に声をかける。

バイクの整備でもしていたのか所々が汚れた作業姿に軍手、首にタオルを巻き、手にはレンチらしき工具を持っている。

歳は初老、といった所だろうか。作業していた為か顔の所々も若干煤けている。

「いや、驚いたよ。バイクで走ってた所をたまたま倒れてた君を見つけたんだけど…まあ、とにかくそこに掛けなよ」

男はそう言つて一回タオルで顔を拭い穏やかな笑みを浮かべながら簞に手近な椅子に座るように勧める。

「…失礼します」

筈は男に一礼すると椅子に腰掛けた。

「まあ、何だ、まざと自己紹介といいひじやないか…立花藤兵衛だ。  
君は？」

「…篠ノ之筈です」

男…立花藤兵衛に対し筈は名乗る。

「筈ちゃんか…その制服から察するに君はEIS学園の生徒だよね?  
何なら俺の方から連絡して迎えに…」

「…駄目…」

藤兵衛の言葉を筈が遮る。

戻りたくなかつた。あんな…あんな話を聞かされた後では心の整理  
が出来るまでEIS学園に帰つて誰かと会いたくなかった。

「…すいません…EIS学園に…連絡は…しないで…頂けますか…？」

筈はうなだれた状態で藤兵衛に謝罪する。

「…分かつたよ。その様子じや訳ありみたいだしね

「…お手数をおかけします」

「気にしなくていい。それよりコーヒーでも飲んで落ち着きなよ。

「うつ見えて「コーヒーの味には少し自信があるんだ」

頭を下げる簾に藤兵衛は笑つて首を振り「コーヒーを入れ、簾に渡す。

「ありがとうございます。なら、いただきます……」

藤兵衛から「コーヒーを受け取ると一口飲んでみる。

「…美味しい」

「口に呑つてたみたいで良かつたよ」

素直に感想を呴く簾に藤兵衛は満足そうに笑つて頷く。

別に「コーヒー党」という訳ではないがこの「コーヒー」は素直に美味しいと思ひ。少なくとも市販の物とは比べ物にならないくらいに美味しい。

これを飲んだら「紅茶こそ至高。コーヒーなんて泥水」なんて常々言つてるセシリアみたいなイギリス人だつてい。

(セシ…リア…?)

モッピー知つてるよーお前がセシリア・オルコットなんてプライドが高いだけで本当はちよろいクセに一夏を誘惑しようとする馬鹿女なんて死ねばいいって思つてる事…

「あ…あ…あ…」

モッピー知つてるよーお前がそんな事をいつも思つてる最低の女

だつて事！

「い……いや……」

モッピー知つてゐよ！お前がそんな織斑一夏に愛される資格なんてこれっぽっちもない最悪の女だつて事！

モッピー知つてゐよ！お前がそんな自分に気付かないフリをして織斑一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女だつて事！

モッピー知つてゐよ！お前が……篠ノ之箒がそんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女だつて事！

「いやあああああつ……！」

箒は「一ヒーの入ったカップを落とし頭を抱えながら絶叫する。

「ど、どひしたんだい！？」

突然の変貌ぶりに慌てた藤兵衛が止めに入るが既に箒は錯乱状態になつていた。

（私は！私は！セシリ亞を！皆を！死ねば…死ねばいいと……）

ひたすら叫び必死に頭を振つて思考を振り払おうとするがすればするほどどんどん深みにはまつていく。

「…すまん！」

意を決した藤兵衛が箒の頬を張る。

「……あ……」

痛みが頬に走ると筆はやっと戻る。

「落ち着いたかい？」

黙つたまま筆は申し訳なさげに頷く。

「……そうだな、少し俺の話でもしようか」

本当はあいつらと…仮面ライダー達と一緒に戦つていたかった。

立花藤兵衛は仮面ライダーと呼ばれる男達を支え続けてきた。

時には厳しく、時には優しく、まさに父親同然に彼らに愛情を注ぎ、彼らの戦いを『ショックカー』との戦い以来影に口向に支えてきた。

そして仮面ライダー達もまた立花藤兵衛を息子のように慕い、『おやつせん』と呼び親しんだ。

その『おやつせん』は『デルザー軍団』との戦いを最後に仮面ライダー達の戦いを支える事は無かった。

まだいけると思つてた。犠牲になつた人達の…岬ユリ子の為にもまだいけると思つてた。犠牲になつた人達の…岬ユリ子の為にもまだいけると思つてた。

だが仮面ライダー達に止められた。最初は粘つた。だけがあいつが

…茂が…

沼田五郎と、岬コリ子の墓を頼みます。

断れなかつた。そんな事をあこつに…城茂に言われて断れるはずが無かつた。

だから後は旧知の谷源次郎…今はそういう名乗つてゐる…に後を託し、俺は戦いから身を退いた。そして茂の親友の、そして愛する者の墓を守り続けてきた。

全ての組織が壊滅すると時たまあいつらは俺の所に顔を出すようになつた。嬉しかつた。息子同然だつたんだ。嬉しくないはずがない。

「…あのトロフィーはその時の…」

「ああ、これでも昔は『攻めの立花』と言われたもんぞ」

藤兵衛は籌に自分の事を話していた。現役のレーサーだった頃の事、喫茶店のマスターもやつていた事、そして『あいつら』の「一チ…『おやつさ』として経験した事。

とはいえ流石に仮面ライダーや悪の組織の事までは話していない。そもそも猛の経歴を聞いて啞然としてたんだからそんな話をしたら尚更だろ?。

逆に藤兵衛は簞の事を殆ど聞こつとしない。あんな反応を見せた直後だ。どんな些細な事がきっかけになつてもおかしくはない。

やつしゆじゆこる内にドアを呑く音が聞こえてくる。

身構える簞を制すと藤兵衛は警戒しながら尋ねる。

「どなたですか？」

「俺だよ、おやつわん」

その声を聞けば誰か分かった。当然だ。息子同然の『あいつ』の声だ。聞き間違えるはずはない。

そのままドアを開ける。

「久しづり、おやつわん」

「よく来たな……茂ー！」

立花藤兵衛の田の前には城茂が立っていた。

暫くドアの前で再会と互いの無事を喜び合っていた城茂と立花藤兵衛だが、茂はふと誰かの視線に気付き、視線の主である少女に気付く。

「おやつたゞ、彼女は？」

「おつと、すっかり忘れてた。彼女は……」

「……篠ノ之箒です」

少女……篠ノ之箒は白い名乗ると一礼する。

（彼女は確かに一度追われていた……？）

茂は一度ISで追われていた彼女を助けている。茂も高々一人の少女相手にISを持ち出してまで追跡していた、という異様な光景であつた事から彼女の事も記憶していた。

しかしそれをおぐびにも出さず

「篠ノ之さん……だったね。前に俺と何処かで会わなかつたかな？」

「……え。人違ひだと思います」

箒は首を振り否定する。

（やはり何かの事情があつて、という事が……）

忘れている、という可能性も最初は考えたがそれは低い。でなければ俺を見た時一瞬とはいえない驚いた表情をすることも、その後

俺を何かと確かめるように観察する事もないだらう。

つまり何か事情が…しかもそういう人には話せない事情があるとう事だらう。

「これは失礼。改めて…俺は城茂。よろしく頼むよ、篠ノ之さん」

「はい、じゅらじゅら。城さんの話は立花さんから伺ってます」

改めて茂は名前を名乗る。どうやらやつせんから俺の話を聞いていたようだ。

「しかしあ前も随分丸くなつたなあ…あ、篠ちゃん。俺は暫く茂と話してるから先に休んでいいよ。あの部屋は今は誰も使ってないから好きにしてくれいいから」

「…ではお言葉に甘えて先に失礼します」

篠は一人に一礼すると二階へと上がっていく。

「…おやつせん」

「分かつてゐる。かなりの訳ありだつてな」

篠が一階に上がつて暫くした後二人は篠の事について話していた。

「俺がここに来る途中で何人か不審な動きをしている女達を見かけたんだ」

「銃で撃たれた傷もあつたし一体どうして…？」

「彼女に何か変わった様子とかは？」

「…」「一ヒーを飲んでたらいきなりパニックを起こしてな。余程の田に遭つたんじゃないかとは思つ」

「…ならおやつさん、俺に考えが…」

「…」夜が更けるまで茂と藤兵衛は再会の思い出話をしきりに篠ノ之箒の事と今後の対応について話し合っていた。

朝の道を一台のバイクが走っていた。

「悪いね、箒ちゃん。こんな時間に」

「いえ…そんな。それに私が出来るのはこれくらいしか…」

一台は立花藤兵衛が運転しており、篠ノ之箒がその後ろに乗っている。

藤兵衛ともう一台のバイクに乗っている城茂は墓参りに行くと聞いたのでせめて恩返しとして墓掃除くらいは、と思つて申し出た。あまりにあつたり承諾されたので少々拍子抜けしたが。

「そろそろ到着だから準備はしておいてくれ」

といふ言葉を聞くか聞かないかの内にバイクは止まり、一人が降りたので篠も後に続き花束を一つ持つて二人について行く。

一つの花束の花は百日草、もう一つの花束は百合の花だ。

森の中にある道を通りしていくとだいぶ開けた場所に出た。

その先にある海に面してやや突き出た岬のようになっている土地に墓は、あつた。

墓碑にはそれぞれ

『沼田五郎之墓』

『岬ユリ子之墓』

とだけ記されている。

茂は篠から花束を受け取ると百日草を沼田五郎の墓に、そして百合の花を岬ユリ子の墓に供えて手を合わせる。同様に藤兵衛も手を合わせる。

「久しぶりだな、五郎…ユリ子…元気にしてたか？」

そして茂は沼田五郎と岬ユリ子がまるで田の前にいるかのように語り掛け始めた。きっと茂にとって沼田五郎は大切な友人であり、岬ユリ子は心から愛していた人であろうという事は、話を聞いている

だけで分かった。

「…羨ましい」

ポツリと、簾が呟く。

羨ましかった。沼田五郎が、岬コリ子が…死して尚、いつして愛され大切にされている一人が純粹に羨ましかった。

「…何を言つてるんだい？」

「そうだよ、簾ちゃん。何が羨ましいんだい？」

二人は穏やかに、しかし訳が分からぬといった感じで簾に聞き返す。

「…私は、死んでもそんな風に悲しんだり、大切にしてくれたり人なんか居ませんし…そんな価値もありませんから…」

「何を言つてるんだい簾ちゃん！？君にだつて…」

「私は…！」

慌てて否定しようとする藤兵衛を簾が遮る。そして自暴自棄となり二人に思いの丈をぶちまけ始める。

「私は…皆を…一夏に近付く女は皆死ねばいいと思つてる最低な女なんだ…！」

「私は…いつもそんな事を思つてる一夏に愛される資格なんてこれ

つぱつちもない最悪の女なんだ！！」

「私は！そんな自分に気付かないフリをして一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女なんだ！！」

「私は…私は！そんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女なんだ！！」

「そんな私の事なんか誰も心配しない！誰も大切になんかしない！死んでも誰も悲しまない！私は…私は…私なんか、生まれてこなければよかつたんだ！！」

言い終わつた直後篝は思い切り頬を張られ…いや張り飛ばされる。

思わず転がり倒れ、起き上がろうとする篝だが、自分の視線先にいる自分を張り飛ばした男を見て動きが止まる。

そこには静かに…しかし凄まじいまでの怒りを燃やして篝を睨み付けている城茂の姿があつた。

「…生きる価値がないだと？…誰も心配しないだと？…誰も大切にしないだと？…誰も悲しまないと？…生まれてこなければよかつただと？」

許せなかつた。たとえ彼女にどんな事情があつとも、それを、こ

「で言う事だけは決して許せなかつた。

「沿田五郎の前で」

五郎。お前とほじょつちゅうひ喧嘩して、馬鹿やって、一緒に笑つてたよな。

一緒に城南大学入つて、偶然出会いつて、軽い気持ちでアメフト始めたの、覚えてるか？

練習、キツかつたな。プレイ覚えるの、大変だつたな。学業との両立、死ぬかと思ったよな。

でも勝ちたいと、思つたよな。もっと強く、なりたかつたよな。  
甲子園ボウル、行きたかつたよな。ライスボール、出たかつたよな。  
だからお前はQBクォーターバックとして、俺はRBランニングバックとして、4年間ずっと頑張つてきたよな。

何回も何回もお前とハンドオフの練習して、何度も何度も試合でハンドオフしたよな。

お前がミスれば俺が怒鳴つて、俺がミスればお前が怒つて、そつやつて何回も何回もミスりながらタイミング合わせ続けてきたよな。

だから始めてプレイが通つた時、嬉しかつたよな。始めて俺がお前からボールハンドオフされてタッチダウン決めた時、滅茶苦茶喜んだよな。

お前が相手のLBラインバッカーにタックルされてもそれをそいつり引き摺りな

がらバス投げて通したの、今でも誇りに思つてゐるぜ。

俺が相手のD-<sup>ディフェンスライン</sup>を吹っ飛ばしてヤード稼いでみせたの、お前誇りしげに見てたよな。

だから俺もお前も後輩達にアメフトの楽しさを、勝つ喜びを、強くなる実感を教える為に一生懸命チーム引っ張つて、後輩の面倒見てきたよな。

けどお前はもう居ない。

お前は死んだ。ブラックサタンに殺された。

辛かつたよな？痛かつたよな？苦しかつたよな？悲しかつたよな？後悔も未練も無念も一杯あつたよな？

もつと、勝ちたかったよな？もつと、強くなりたかったよな？甲子園ボウル、行きたかったよな？ライスボウル、出たかったよな？

もつと喧嘩して、馬鹿やつて、笑っていたかったよな？

でもお前はもう居ない。

お前とはもつと喧嘩してたかった。お前とはもつと馬鹿やつてたかった。お前とはもつと笑い合いたかった。

でもお前は死んだ。ブラックサタンに殺された。

お前がいなくなつて俺も辛かつた。苦しかつた。痛かつた。悲しかつた。後悔も未練も無念も一杯あつた。

お前がいなくなつて俺も辛かつた。苦しかつた。痛かつた。悲しかつた。後悔も未練も無念も一杯あつた。

だから俺は、ブラックサタンと戦えた。

「岬コリ子の前で」

コリ子。お前とはしょっちゅう喧嘩したけど、意地張つてばっか  
だつたけど、ずっとずっと 好きだつたんだぜ？

一緒にブラックサタンの基地から逃げ出して、一緒にブラック  
サタンと戦つて決めたよな。

辛い時もあつたな。苦しい時もあつたな。やつぱり喧嘩した時も  
あつたな。

でも連中には負けたくなかったよな。この世界を守つて、平和な  
世界にして、そして

その為にお前は『タックル』として、俺は『ストロンガー』とし  
て、一緒に戦い続けてきたよな。

何度も何度もお前と一緒にブラックサタンの企みをぶつ潰して、  
何回も何回も奇械人をぶつ倒してきたよな。

いつもいつも手柄を巡つて喧嘩して、意地を張り合つて、そうや  
つて何度も何度もぶつかりながらブラックサタンと戦ってきたよな。

だから始めて連中に勝てた時は嬉しかつたよな。始めて連中の野  
望を阻止出来た時は喜んだよな。

俺はお前がいたからこそずっとずっと『仮面ライダーストロンガー』として戦い続けてこれた。

だからお前には本当なら『岬コリ子』といつ一人の女に戻つて欲しかった。

お前、一度俺がなぜ仮面ライダーって名乗らないのか聞いた時「未練、かな」って言つてたよな？

今ならその意味が分かるぜ。お前は孤児の俺と違つて家族が…お前と一緒にブラックサタンに攫われ、そして殺された家族がいたもんな。

だから、『岬コリ子』の名前を捨てたくなかつたんだよな。

そんないじらしくて、愛しいお前はもう居ない。

お前は死んだ。テルザー軍団から俺を助ける為に死んだんだ。

辛かつたよな？痛かつたよな？苦しかつたよな？悲しかつたよな？後悔も未練も無念も一杯あつたよな？

もつと喧嘩してたかったよな？もつと意地張つてたかったよな？平和な世界を一緒に見たかったよな？もつともつとずっと一緒に、いたかつたよな？

でもお前はもう居ない。

俺はお前ともつと喧嘩してたかった。お前ともつと意地張つてたかった。お前と平和な世界と一緒に見たかった。お前ともつともつ

と ずっと一緒に、いたかつた。

でもお前は死んだ。デルザー軍団から俺を助ける為に死んだんだ。

お前がいなくなつて俺も辛かつた。苦しかつた。痛かつた。悲しかつた。後悔も未練も無念も一杯あつた。

だから俺は、デルザー軍団をぶつ潰せた。

「二人の前で」

そんな辛くて痛くて苦しくて悲しくて 後悔も無念も未練も一杯あつて もつともつと ずっと生きていたかつた二人の前で

「絶対にそんな事言うんじゃない！」

茂は簫に咆哮する。そして

「…いい加減出てこい！悪いが今の俺は少し気が立つてんだ！」

自分達を監視していた者達が隠れている木々を睨み付けて叫ぶ。

「あら、バレた。まあいいわ。手間が省けたもの

黒いプロテクターらしき物を着用した11人の女達が姿を現し、茂と藤兵衛と簫の前に立つ。立ち上がり身構える簫の様子からして彼

女を銃撃したのは真ん中のリーダー格らしき女らしい。

「大人しく彼女を引き渡せば貴方達一人は解放してあげるわ。でも  
断れば…」

リーダー格らしき女が合図をするとその女以外の10人の女達は瞬時に黒いISを装着した状態となっていた。

「馬鹿な！？」

「IS自体を量子化していた！？」

茂と篠は同時に驚きの声を上げる。

無理もない。IS自体を量子化し、『待機形態』と言われる形…大抵アクセサリー型になるが…で持ち運び、いざという時に展開・装着する機能はISの中でも『専用機』と呼ばれる物に限られる。

少なくとも『専用機』に近い改造を施された量産機でもなければこのように瞬時にIS展開・装着する事は出来ない。

入れ替わった様子もない限りあのプロテクターはかなり改造が施されたISスースなのだろう。

篠はそれを見ると左手首に巻かれた金と銀の鈴が付いた赤い紐に手をかけるが、

『モッピー知ってるよ！お前が生きている価値も無いクセに姉にねだつて手に入れた汚い力を…そのISを使って生き延びようとあがく醜い女だつて事！』

リーダー格の女が『モツピー』なる人形を取り出し腹話術で簞に語りかかるとビクッと身体を震わせ、手を放す。

( I.S…姉…篠ノ之…そういう事が！ )

茂には今まで篠ノ之簞に抱いていた疑問や彼女を取り巻く状況を理解する。

彼女はI.Sの開発者である篠ノ之束の妹なのだろう。現在I.Sの中核部であるコアの情報を握っているのは束のみだ。そこで女達は妹である彼女に目を付け束との取引材料として確保するという事を決めたのだろう。

ならば合点がいく。わざわざたった一人の為にI.Sを10機も持ち出した事も、そしてそれだけの数のI.Sを…しかも専用機に近い性能を持つであろう機体を用意出来るだけ組織がリスクを犯して動くだけの理由がある。

( となるといつらは…やはり『ファンタム・タスク亡国機業』… )

そしてそれだけの規模がありここまで露骨に非合法な手段を辞さない組織は最早『亡国機業』くらいしか残っていない。

茂が今まで戦ってきた組織に比べれば科学力や危険度こそ劣るが、社会への浸透度や根の深さでは圧倒的に優れる厄介な連中だ。

現在茂やその先輩後輩達が戦っている新たな『悪の組織』だ。

「彼女も『汚い力』を使ってまで抵抗する気もないみたいだし…大人しく引き渡してくれないかしら？」

「…嫌だと呟いたり… わやつたこー。」

「任せろー。」

茂に答える藤兵衛は簾を連れて後ろに下がる。

すると『モッパー』がEISの待機形態だったのか、その持ち主も瞬時に黒いEISを展開・装着していた。

そして茂も黒い手袋に手をかけ…

「… そりだよな。『汚い力』を使って生き残るのは、嫌だよな

たところで止め簾にせりふをそのまま素手でEISに殴り掛かつて  
いった。

「何で… 何で… ?

簾には生身で単身EISに挑むといつ茂の行動が理解出来なかつた。

確かに茂は強かつた。最初は余裕の表情を浮かべていた女達も今は焦つて銃や近接用ブレードまで取り出してまで茂を止めるにかかっているが茂はまだ立つている。

「…どうした…全然…効いちゃ…いねえぞ…」

ただし茂の方は既にボロボロだ。何度銃撃され、斬撃を受けたのだろうか。最早立っているのもやつとだろう。むしろ今までこいつやつて立つてるのがおかしいくらいだ。

「何で『あの姿』になつて戦わないんですかー?」

筈はボロボロになつて尚素手で戦い続けている茂に向かつて叫ぶ。  
筈には分かる。きっとあの時の…カブトムシみたいな姿になつて戦えばこじままでボロボロになる事は無かつたと。

「…そうか…あの時…俺を見てた視線は…君だつたのか…殺氣は無かつたから…放置してたんだが…まさか…『変身』を…解除してる所まで…見られてたとはな…俺も…ヤキが回つた…もんだぜ…」

しかし茂は筈の問いには答えずに銃弾の雨を被弾覚悟で突つ切り、  
ISを殴る。

「…君はあいつの…茂の…『ストロンガー』の姿の茂を見た事があるんだね?」

黙つて頷く筈を見ると藤兵衛は続ける。

「…あいつには親友が居たんだ。沼田五郎…あの墓に眠つている沼田五郎つて親友がな。彼は悪の組織に…『ブラックサタン』に殺されたんだ。そしてあいつは…茂は…親友の仇を取る為に自らブラックサタンに志願して『力』を…改造人間の身体という『力』を手に入れたんだ」

「……」

「勿論それは演技だつた。そしてあいつは同じく改造手術を施された女と…『岬ユリ子』と共に人々を守る為、正義の為にブラックサタンと、そしてその後から出てきた悪の組織と戦い続けた・最愛の岬ユリ子を失つても、だ」

「…簞ちゃんの事情はよく分からぬ。けどあいつが得た改造人間の身体…『ストロンガー』の力は君が思つてゐる『汚い力』なんだ。例えそれを正義の、人々の為に使つても、力を得た経緯が『復讐の為に自ら惡の組織に身体を差し出した』事である以上、あくまでそれは『汚い力』なんだ」

「で、でも何で生身で…？」

「…あいつは昔から『捻くれ者』で、『意地つ張り』で、『格好つけたがり』で、『不器用』で…そして『優しい』ヤツだつたからな…きつといつするしか思い浮かばなかつたんだろう」

簞は沈黙するしか無かつた。自分の力は…『赤椿』は経緯が『他の連中を見返す為だけに犯罪者である姉になだつた』という実に『汚い力』だ。或いは城茂という男はそれにも気付いていたのかも知れない。

「…がつ…？」

戦況を見直すとさしもの茂も斬撃と銃弾を受けすぎたのか身体中から血を流し、もう倒れそうである。だがそれでも膝すらつかずに立ち向かおうとしている。

「茂！…」の野郎！」

藤兵衛は倒れそうな茂を見るといつてもたつてもいられずエスに素手で殴りかかるがあつたり弾き飛ばされる。しかし藤兵衛は怯まず立ち上ると再びエスへと向かつていく。

「行け！簫ちゃん！」「こは俺達で食い止める！俺の…茂の為にも逃げてくれ！」

また殴りかかり、また弾き飛ばされ、また立ち上がりながら藤兵衛は簫に叫ぶ。しかし簫は動けない。

かちり、と何かが背中で音を立てる。

刀だ。背中に背負つ形でこちらに持つてきっていた刀だ。

刀を背中から下ろし、布を取り払う。

(立花さんを…城さんを助けなければ…)

何もかもが意識から吹き飛び、ただそれだけの一念だった。

気が付くと簫は気合と共にエスに斬りかかっていた。

刀でベッドすら刃零れさせずに両断可能なその剛剣の前に、さしもエスも道を開ける。

「立花さん…今之内に城さんを…」

「分かつた！」

今にも倒れそうな茂を藤兵衛が支えて後ろに下がるのを確認すると  
筈はそのまま刀を振るい奮戦する。

…とはいえ所詮は生身一人、I S 1 1 機の敵では無い。やがて筈は  
刀もろとも弾き飛ばされ、地面に仰向けに倒れる。

「手間かけさせないでよ…これでおしまいね」

11人の女たちは筈を取り囲み、ゆっくりと…しかし確実に歩きな  
がら包囲の輪を狭めていく。

そして筈に手を伸ばし…

「…その娘に…触るんじゃねえーー！」

切る前に背筋が凍る程の殺氣を感じし思わず振り返る。

そこには先程筈に見せたそれすら生易しく感じる程の怒氣を発して  
仁王立ちする男…城茂がいた。

茂の肉体には至るところに流血と傷があった。

しかし茂は藤兵衛の支えを借りず、自らの足で大地を踏み締めていた。

そして茂は女達を無視して筆に語りかける。

「……歿死ねばいいと思つたんだと、違つだろー。その娘達と仲良く出来て、会えて良かつたとも思つた事もあつただろー。」

「うだ。私は皆と一緒に一夏の取り合ひで、鈍感さに溜め息をついて、応援して、笑い合つて……皆と出来て良かつたと思つた事は嘘なんかじやない。」

「……愛を独占しようとしているだと、違つだろー。彼の為にその身を全てを投げ出しても構わないと思つた事は嘘なんかじやない。」

「うだ。『銀の福音』との戦いの時に一夏の為なら命を全てを投げ出しても構わないと思つた事は嘘なんかじやない。」

「救い様が無いだと、違つだろー。誰かを……俺を……おやつさんを助ける為に無心で戦つてただろー。」

「うだ。あの時立花さんを、城さんを助けたいと思つた事は嘘なんかじやない。」

「だったら、君のライバルが君を心配しないと思つかーー？」

違つた。皆私と一緒に一夏を取り合ひて、一緒に溜め息をついて、励まし合つて、笑い合つて……優しい皆がそうしてきた私を心配しない筈

が無い。

「君の想い人が君を大切に思つてないと思うか！？」

違うな。一夏は確かに鈍感だが優しくて『銀の福音』の時も命懸けで私を守ろうしてくれた。そんな一夏が私を友人としてだが大切に思つてない筈がない。

「俺が…おやつさんが…俺達が君の死を悲しまないと思うか！？」

違うな。わざわざ出会つたばかりの私の為に命を張つて無茶をしてくれている。そんな人達が私の死を悲しまない筈がない。

「確かに君は最低かも知れない…最悪かも知れない…救い様はないのかも知れない…だがな、君には生きている価値はある！たとえ君がそう思つてなくとも！君を心配してくれる皆には！大切に思つてくれる想い人には！悲しんでくれるおやつさんには！俺には！君に生きてもらう価値があるんだ！君にずっと生きていて欲しいんだ！」

「だから！その人達の為にも生きて生きて生き続ける！最低と言われても！最悪と罵られても！救い様が無いと言われても！その人達の為にも生きる事にしがみつけ！その為ならどんなに『汚い力』を使ってでも！最後まで諦めずに足搔いてみせろ！！」

幕にそれだけ言つと茂は膝を地面に付く。余程堪えたようだ。

聞こえるか、『紅椿』。心があるなら、聞いてくれ。

私は最低な女かもしれない。最悪な女かもしれない。救い様のない女かもしれない。

でも私は生きたい。心配してくれている皆の為にも、大切に思つてくれている一夏の為にも、悲しんでくれる立花さんと城さんの為にも。

一度はお前を『汚い力』と拒んだ私だ。厚かましい頼みかもしない。

だけど、頼む。皆の為にも、一夏の為にも、立花さんと城さんの為にも、今一度、今一度だけいい

お前の力を、私に貸してくれ！！

それに応えるように筈の身体を開いた『紅椿』が包み込む。

「ちつ…こんな事で…！？」

動搖する女達を『紅椿』を纏つた筈はスラスター出力を最大にしながら突撃し蹴散らすと、藤兵衛と茂を抱え上げ、そのまま一瞬で敵を見渡せる高台へと飛ぶ。

そこで一人を降ろすと筈は強い決意を抱いた目で敵を見定める。 1  
1人。他にはいない。少々数が多いが今の私なら問題ない。

(ありがとう、『紅椿』)

心中で血の無茶に付き合つて愛機に礼を述べつつも一人を振り返る。

「ありがとうございました、立花さん、城さん…今度は私が貴方達を守ります！」

「…いや、西は俺を『手伝つて』くれればよい

しかし茂は立ち上ると躊躇に歩み寄る。その顔には不敵な笑みを浮かべていた。

(へッ、間抜けだぜ)

茂は心の中を搔く。

俺達はお前らを誘い出す為にわざと彼女を外に連れ出した。そしてお前らはまんまと引っ掛けりやがった。

まさか一人の墓の前でこんな事になるとは思わなかつたけどよ。

「あの、城さん…」

「…何だい？」

「どうして私を…そこまでして助けてくれるんですか？」

当然の疑問だな。俺だってそう思つだろ。

けどな…『分からぬ』んだ、俺にも。

君に五郎を…沼田五郎を重ねていたのかもしれない。

君にユリ子を…岬ユリ子を重ねていたのかもしれない。

君に俺を…昔の俺を見てたのかもしない。

俺が単なるお人好しだからなのかもしれない。

それが俺の『正義』だからのかもしれない。

はたまた君を狙い、君の心を踏み躡り、君の未来を狙おうとする奴らがブラックサタンやデルザー軍団に重なつて許せなかつたからなのかもしれない。

だが俺には分からぬ。だから君への答えは『分からぬ』、だ。

だけど俺は『分からぬ』なんて事を君には言わない。

俺は昔から『捻くれ者』で、『意地つ張り』で、『格好つけたがりなんだ。

だから、君にこう答える。

「そんな事…」

… 久々のは久しぶり、かもしだれないな。

「そんな事…俺が知るか！」

それだけ言つと不敵に笑い、黒い手袋を外し、コイルを巻かれた腕を出す。

俺は復讐の為に自ら悪の組織に身体を差出し、力を得た。俺の身体はそんな汚い、呪われた代物だ。だが今の俺は決してそれを後悔なんかしていない。

それで俺の正義を、信念を、魂を、生き様を貫けるのなら

それで人々の そして篠ノ之箇の命を、人生を、笑顔を、幸せを、心を、未来を守れるのなら

それで沼田五郎の、岬ヨリ子の後悔を、無念を、未練を、思い出を、生きた証を背負えるのなら

そしてそれで今日の前にいる悪を討ち滅ぼせるのなら 後悔なんて、あるわけがない！！

両手を右横に突き出し、ゆっくりと左斜め上へと持っていく。

「変身…ストロンガー…！」

そのまま両手を擦るように動かすと茂の身体にスパークが走り、その姿をカブトムシを模した電気を操る改造人間『電気人間』のそれへと変える。

氣高く可憐に咲く一輪の紅い椿を守るように、雄々しく鮮烈に輝く一筋の赤い雷光は前へと進み出で、自らの名前を高らかに名乗る。

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！」

「聞け！悪人共！俺は正義の戦士！」

「仮面ライダー…ストロンガー…！」

その身に正義と魂を宿し、苛烈に悪を撃ち据える赤い雷光…7番目

の仮面ライダー『仮面ライダーストロンガー』は名乗り終えると篠ノ之箇と共に悪へと戦いを挑んだ。

「電…パンチ！」

城茂：仮面ライダーストロンガーは敵のＩＳに対し電撃を纏つた拳を叩き込む。純粋な威力のみならず電撃による追撃まで加わり、ＩＳのシールドは削られる一方だ。堪らず後退する。

「この！たかが一人に…！」

仮面ライダーストロンガーは地上で6人を相手にしていたが優勢に戦いを進めていた。敵の一人がアサルトライフルを向けて仮面ライダーストロンガーに放つが

「遅いぜ！電キック！」

そのまま飛び上がった仮面ストロンガーに逆に電撃を纏つた飛び蹴りを浴びせられる。

その威力の前に食らったＩＳの『絶対防衛』が発動するが、ＩＳは大きく吹き飛び、そのまま沈黙を余儀なくされる。

「まずは一つ！」

そのまま仮面ライダーストロンガーは残りの5人を睨み言い放つ。

「さつあまでの威勢はどつした? ピビッて声を出す威力もねえってか?」

「…小癩なー上よー上に逃げればヤツは追い付けないわ!」

そつ言ひて上に逃げよひとするが…

「…」

『紅椿』を纏つた筈に斬り捨てられたISが地面に落下して盛大に叩きつけられたのを見て思い留まる。

上空では筈が単身奮戦していた。

身上に纏う『紅椿』は第4世代ISである。各国が漸く第3世代の開發に着手した中で束から筈に渡された『紅椿』は、全てにおいて既存の機体を遥かに凌駕する性能を誇っていた。

筈はその性能を最大に生かし敵を翻弄、そのまま肉迫し、皿麿の剛剣を存分に敵に叩き込んでいた。

逃げようと思えば『雨円』のレーザーで追撃し、困もうと思えば『空裂』のエネルギー刃で切り払つ。

「クソ! 何で… 何であんなの使つてエネルギー切れになんないんだよー?」

筈と対峙していた敵が悲鳴のよつと呟く。

ISには切り札とも言える『单一仕様能力』と呼ばれる特殊能力が存在する。

この『紅椿』の单一仕様能力『絢爛舞踏』はISのエネルギーを百倍まで増大させるというものである。

すなわち『紅椿』はこの『絢爛舞踏』が発動している間はほぼエネルギー切れを無視して戦える。

その為高性能だが燃費が悪い装備で固めている『紅椿』が長時間戦えるのだ。

もつとも、それをこうして今自在に発動出来るようになったのは先輩の指導と彼女の努力の賜物だが。

篝は敵の銃撃を悉く回避すると一機とつばぜり合いの形に持ち込む。

「これで… 2つ…」

そのまま摺り上げるようにつばぜり合いから脱すると敵を斬り捨て、次の標的へと目を付け、『兩月』を構える。

八双…むしろ示現流で言う『蜻蛉』の構えだ。そのまま『一』の太刀要らず』とまで言われた示現流自慢の初太刀と同じ要領で敵に一気に踏み込み、敵の防御ごと叩き斬る。

「これで3つ…」

「だが隙だらけだよ！」

嘲るように敵が追撃をかけてくる。

示現流は『攻め』を重視する剣術だ。故に守りは軽視し、『受け』を持たない。かの新撰組局長近藤勇をして恐れさせた示現流の初太刀だが、それさえ終わればどうにでもなる…というイメージを持たれがちだ。

実際は『受け』こそあまりないがその分回避や見切りを重視した複雑な流派である。現に籌は敵の攻撃を全て見切り、回避している。痺れを切らした敵が勝負に出ようと近接用ブレードを振り上げた瞬間、筹はスラスターを一気に噴かし抜き胴の要領で一撃を…『後の先』の一撃を加え、敵を地面に叩き落とす。

「これで4つだ！」

一方地上では仮面ライダーストロンガーが2機のI.Sから放たれたワイヤーで両腕を拘束されていた。

「これで終わりだ！」

「黒焦げのトーストになっちまいなよ！」

そしてそのまま仮面ライダーストロンガーに高圧電流を流し込む。

「…わざわざ有難う…よー」

しかし『電気人間』である仮面ライダーストロンガーには効かない

所か逆にパワーを『えただけに過ぎなかつた。

そして逆にワイヤーを持ったまま勢いよく回し始める。

「こいつはお釣りだ、とつときな…コレクトロファイヤー！」

十分遠心力をつけると仮面ライダーストロンガーはお返しとばかりに2機に高圧電流を流し込みながら他の2機へと放り投げ、4機纏めて沈黙させる。

「これで5つだ！」

そして仮面ライダーストロンガーは地上でリーダー格の女を…篠は空中でもう一人の生き残りを見据え冷たく言い放つ。

「あとは、お前だけだ」

空中の敵は閃光弾で篠の視界を一瞬眩ますとパッケージらしきブースターを装備し、一目散に逃げ出した。

「逃げるが勝ちさー！」の『ライトニング』パッケージに追いかけるものか！」

実際単純な加速性能や最大速度だけなら現段階での『紅椿』すら上回っているだろつ。

(だがそれでは回避行動など全くとれまい)

しかし筈は敵の装備の弱点を見抜いていた。

それだけのスピードを求めれば当然だ。ロケットと同じだ。

しかし舐められたものだな。どうせ剣術馬鹿の…武術馬鹿のお前にまともな飛び道具など扱える筈などないと高を括つて居るのだろう。

否定はしない。私は銃の扱いは苦手だ。仮にあつてもお前に当てる事は出来ないかも知れない。

だが忘れたか？知らなかつたか？

（剣術は…武術は戦場で生まれたものだと…）

戦国期の剣術の使い手は得てして他の武器の扱いにも長けて居る事が多い。戦場で必要な以上必然だつて。当然ながらその中には『』も含まれる。

例え使う武器が違えども基本は同じだ…それが『』であつとも。

『紅椿』の両肩展開装甲が変形し、『…クロスボウの形を取る。

（『紅椿』よ、再び私に力を示せ…そして…）

PHCを全て機体支持に回し、精神を極限まで集中させる

「穿て！奴よりも速く！…」

そしてクロスボウ…『穿千』から放たれた一撃必殺の閃光は一瞬の  
内に敵を撃ち落としていた。

(…どうやら下も決着らしいな)

ハイパー・センサーで下の様子を捉えると少しした後篝はスラスター  
を噴かし地上へと向かつた。

尚も足搔く女だったが、仮面ライダーストロンガーの猛攻の前に手  
持ちの武器は全て破壊され须くしていた。

「化け物め！ いつか必ずこの屈辱は…！」

それだけ言い残すと『ライトニング』パッケージを呼び出し、全速  
力での離脱を図りつとする。

だが、逃がさねえ。

「チャージアップ！！」

そして仮面ライダーストロンガーは切り札を切る。

己の体内に埋め込まれた『超電子ダイナモ』を起動させ、プロテクターに銀のラインが入り角も銀に染まつた『超電子人間』としての姿へと変わる。

この姿は1分間しか保てない代わりに通常の100倍という圧倒的なパワーをストロンガーにもたらす。

それだけあれば、今日の前から逃げようとしている悪を倒すには十分だった。

ヤツが飛び立つ直前に一気に飛び上がり、上をとむ。そして言つてやる。

「止まって見えるぜ、お前の動きはよ

そいつの絶望したような顔が見える。だが自業自得つてヤツだ。

そのまま『超電子ダイナモ』から溢れだす力を足に込める。そして身体を螺旋の…ドリルのように高速回転させ、渾身の蹴りを放つ。

「超電子ドリルキィイイイックー！」

そして少女は 篠ノ之箒は一人の男と一人の女の後悔と無念と未練と生きた証を背負い、闇を切り裂き燐然と輝く一筋の赤き雷光の姿を、確かに見た。

夕暮れの中、城茂と立花藤兵衛、そして篠ノ之箒は沼田五郎と岬ヨリ子の墓の近くに佇んでいた。

「そろそろ迎えが来てもいいころだと思つんだけどな……」

「あれだけ派手に暴れたらヨウ学園側でも嫌でも気付くだろうけどね」

そんな事を藤兵衛と茂が話していると、

「第一、」

「…一夏…？」

「どうやら迎えが来たらしい。しかもよりによつて篠の想い人…織斑一夏のようだ。まだ遠いのかこちらからは声しか聞こえない。」

「立花さん、城さん、お手数をおかけしました」

「いいよいよ、気にしなくて」

「それより早く行つてきな…たまには抜け駆けつても悪くないもんだぜ？」

穏やかに笑う藤兵衛と悪戯っぽく笑いウインクしてみせる茂。

「あの、最後にもう一度…本当に、ありがとうございました！」

微笑みながら一人に一礼すると篠は声を上げ、一夏の下へと走つていった。

篠と一夏が談笑しているのを藤兵衛と共に遠田で見守りながら、茂はふと一夏と篠に自分と愛する者を重ね合わせ、思いを馳せる。

コリ子、これでいいんだよな。いつもあの子が普通に笑つて、普通に恋をして、そんな平和な世界が、お前も見たかつたんだよな

…その後暫く篠と一夏の会話を聞いていた城茂と立花藤兵衛が、『

「…どうりどもないだろ？な」

「流石に彼の鈍感さばっかりはいくら俺でも…」

「…こくら何でも彼女の『お前の隣で笑顔でいたい』発言を聞いて

『なら今度一緒に寄席でもいくか』って答えはないと思つか？』

「…篠ちゃんの恋の行く末は大丈夫なんだろうか…？」

「…だから、聞くな」

「…せどねやつわざ」

「…何も、聞くな」

「…でもねやつわざ」

「…聞くな」

「…おやつわざ」

仮面ライダー』とその『おやつさん』でもビックリする程の織斑一  
夏の鈍感さと、そんな彼に恋をした篠ノ之箇の将来を憂い溜息をつ  
くのは、また別の話である。

(後書き)

拙作をお読み頂きありがとうございます。

今回も悪戦苦闘し何とか書き上げられましたが、相変わらずの文才や構成力の無さを恥じるばかりです。

尚、本作を含めた仮面ライダーとE.Sのクロス作品は特に断りが無い限り同じ設定、世界観という前提で書かせていただいております。

とはいっても他の作品を読まなくとも大丈夫なようには努力しておりますので参考程度に聞き流して頂ければと思います。

最後にもう一度、拙作を最後までお読み頂き、誠にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6453y/>

---

少女は雷光を見たか

2011年11月19日20時29分発行